

2022年深秋・「南紀最後の旅」抄  
増田陽一

お互に歳だから、何とか元気なうちに生き残ったきょうだいに会って置きたいので、東と西の中間、京都ででも、とも思ったが、どうせ行くなら父母の生家が残り、妹の隆子が住んでいる紀伊御坊市にということになった。僕は既に92歳の老衰、歩行困難であり、長途の旅など予想しなかつたけれど、最寄り駅の南柏まで歩ければあとは電車とタクシーだから、と聞いて決心したのだった。

10月30日朝、東京駅のホームで甥の敬と待ち合わせ、以後は彼とその親父の鷹三とに連れて行ってもらうのである。新大阪からは「黒潮号」という紀伊半島直行の列車がある。新幹線、黒潮号共に2時間少々。途中、天王寺で鷹三と再会してこの先よろしく、と。3時半頃御坊駅に着く。何年ぶりだろうか。仮に五十年ぶりとしておく。駅待合室はどうなっているか、と思ったのは、中学時代に同級の画友中西章とここで人物のスケッチをした記憶からである。敗戦直後で紙も画用の鉛筆もなく、紙は古雑誌の活字の頁に、鉛筆は学校の理科室で廃棄した解剖皿の底の黒い蠟に定規を当てて切ったクレヨンだった。速写の習練の必要はその頃技法書で読んだドラクロアの言葉から来ていた。待合室は広いのでモデルにした人に気づかれないと思っていた。そこは今でも相変わらず狭く、南紀名物の料理魚「クエ」の魚拓が目を引くばかり、平成15年10月7日に日ノ御崎の沖で釣れた全長1・4mと説明のある大物である。(その後何処へ行ってもクエ料理の看板があった。)駅からタクシーで日高川沿いに天田橋、ターンしてすぐ御坊市内に入る。目的の一つが東町の母の生家、祖父上田金兵衛旧宅がまだあるかどうかだった。行ってみるとそれは残ってみて、寂れていた。道の向い側に終戦後我々一家で住んだ茶室があったはずの、嘗て僕が「夏は青葉木菟が棲み付き、冬は狐が徘徊した。」と書いた日本庭園の跡は今はしょぼしょぼと草の生えた空地である。上田家横の路地「うし街道」と隣の寺「お御堂」と大銀杏はほぼ記憶通り、隆子の家はすぐ近くだった。再会を喜び、御坊名物の釣鐘饅頭や鮎の菓子など昔と変わらず、健在を喜びあって、そのあと近くで隆子も馴染みらしい「浜の家旅館」に落ち着く。寂れた路地の旅籠めいた宿である。ひとつ夜、再会を祝して隆子とともに酒と歓談を続け、鮎の焼きものを筆りながら痛飲したのである。もともと僕の主要目的は鷹三隆子とお互い元気なうちに会っておくことだった。以後の思い出の旅、僕から言えば感傷旅行は、奈良で「歩く会」をやっている鷹三が上手に組み立ててくれた。

10月31日 起きると窓の下はお御堂の墓処であり、朝早く墓掃除の人や併設幼稚園の園児の登園が見える。大銀杏の向うは金兵衛旧宅である。タクシーで出発、御坊を出て吉原通り、従兄の林茂さんの生家はもうなかった。川を渡り左に煙樹ヶ浜に沿って西山山麓の和田村、タクシー待たせて父の生家を訪う。ここも戦争のさなか、東京から一家疎開で来て住んだところ、当主の従兄俊吉ちゃんも松子さんも亡くなり、娘の静代さんが住む。昔、格子戸を開けると奥まで土間で、壁に家紋入り提灯の箱が並び、大きなカマドのある広くて暗い厨房、上り框に家族の箱膳を並べ、祖父の隆祐が火鉢でチロリの酒を温めて居たけれど、今は現代風に改造されている。家の周り、夏はカトリヤンマが蚊を食べに来る夏蜜柑畠だったのが今は無くなっている。またタクシで御崎神社あたりから引き返し煙樹ヶ浜に出来た舗装路を走る。思い出の海岸林は荒れて下草が茂り、昔の面影が薄れる。昔は村人が松の落葉を熊手で集めて燃料にする習慣で何時も篝目がついてきれいだった。松露が採れたこともある。祖父を火葬した墓地はまだそこにある。松林を抜けて御坊に戻る。古民家を改造したソバ屋で昼食、となりに画廊があり、やはり古民家で靴を脱いで上る。養護学校生(?)の作品の展示があって、とて

もいい絵だった。別棟で同じ作者達の陶器の販売までしている。それから何と、母校の日高高校を訪ねさえしたのである。前もって敬が連絡したので学校では一期生の訪問を歓迎すると言ってくれたそうで今更面映ゆいけれど、なりゆきに任せた。鷹三、隆子、敬が一緒に来る。教頭先生が玄関で迎えてくれて、同窓会会长の津村氏（先年東京での同窓会で、二階氏と共にお会いした。）「日高奨学会理事」の山下氏と校長室で会談した。歴代校長の写真の中に、日高中学のときに僕や中西章と共に昆虫採集に熱中した懐かしい田畠秀夫先輩の額もあった。僕は先に出版された「日高高校百年史」に寄稿もしているが、旧制中学終りの敗戦後混沌の時期、普通の勉強はそっちのけにして「文芸部」「美術部」「生物学部」と、クラブ活動と同人誌作り、好きなことにだけ勝手に熱中した仕方のない生徒だったのである。「歓迎」を謝し、玄関前で写真を撮って辞去、ここで隆子とは別れ、次は由良の白崎まで長途のドライブである。昨日の運転を見込んで続けて頼んだ運転手。御坊からいきなり入山の脇に出て小池を過ぎ、志賀村から左に西山へ登る屈折した路に入り、頂上近くから浜の景色を眺望する。昔見た沖の岩礁、カツオ島が見えないとしたら、海上の白い建築群がその鰐島を土台にした発電所だと言う。新設の強力な発電施設で、蛍光灯の管を持って近づくと電線なくて発光する、という話である。山を降り叔父の湯森順吉旧宅など判らぬままに奥志賀を抜け、産湯海岸のあたりから海岸線に沿って姥目樫の木立の間の曲折を走りぬけて由良港の巨船ドックを過ぎる。ここは外国船や潜水艦が修理に入るそうである。そして白崎が見えた。磯伝いの路は舗装され、車のまま新しいトンネルを抜ける。昔の記憶にある岩剥き出しの暗い抜け道はもう無かった。岬はほしいままに採掘され、辛うじて遺された崖の内側は月面かと思う異様な光景である。セメント会社が限界まで掘った跡が現在観光用に遺されているらしい。

二日目の宿「白崎ハイツ」には崖の細道を登る。熟練の運転手で難なく

登った。彼に明日を約して別れる。

宿のロビーに多くの貝殻の展示があるのでいた。部屋は3階まで階段を這い上ると、窓が白崎の岬と前方の立巖に正対している。夕日が翳り、立巖の一面が淡く照っている。旧制中学5年頃、初めての油絵を描こうと白崎に通ったのだった。終戦で陸軍士官学校から同じクラスに編入されてきた山名将治君が、由良で禅宗の名刹興国寺に寄宿して居たので同宿させてもらい、バスで白崎まで通ったのである。白い岬に朝日が当る絶景を描こうなどと幼稚なことを考えた。その後何点かこの付近を描いたと思う。宿から暮れてゆく岬を眺める。夕食は鰯の塩蒸しにイセエビの刺身などで鷹三と敬とで燭酒を呷りつつ再会二日目の岬の夜が楽しく更けて行くのだった。

11月1日 朝、微雨にかかる岬を眺め、昨夜のイセエビの残りで仕立てた味噌汁の朝食。昨夜生きていた海老の貌を眺める。給仕の若い女性は南柏に居たことがあり、姉妹3人とも広池学園の卒業だそうである。父君が貝類の収集家で、タカラガイの新種に「ニシバタダカラ」とその名がついているそうだ。（西端宝、1961年波部忠重の命名で学名もある）娘さんを皆あの「最高道徳研究」の学園にやった貝類研究家の西端氏とは興味ある人物である。改めてロビーの貝殻標本を見るうち、昨日の運転手が御坊から迎えに来た。小雨の中を出発。由良港を後にして国道42号線を御坊から天田橋を渡り塩屋、印南、切目、岩代、南部と渡って行く。これら一連の地名までが不思議に懐しく、出来れば父祖の地の「地靈」の作用でもう少しましな俳句が作れないか、などと思うのだった。父、収が田辺中学入学の前日、沖が荒れて船が出ない。歩こうという祖父隆祐に従って狐狸の出る山中を徹夜で歩いたと言う、その行程にほぼ平行して田辺まで延々とドライブ。

さて、日高中学の同級で精神科医の津本一郎君が熊楠の研究家で、『天才と狂気』などの名著があるが、彼の説では「南方熊楠翁は田辺の人と

思われているが、実は日高に縁が深く、御坊の東町が熊楠の祖母一族の地で、東町出身者には熊楠翁と同じ遺伝子を持つひとが多く居た筈だ。」とのこと。(津本君自身も東町出身) また「我々が日高中学で英語を習った楠本定一先生が田辺中学で熊楠の長男、熊弥と同級だった。よく家に遊びに行って熊楠翁を近くで見た。そのことを書いた『紫の花天井に』という楠本先生の著書が重要な熊楠研究資料となっている。」と、そんなことを思い出しながら田辺市に入った。熊楠の「神島」は見えたか見えなかつたか。

「熊楠顕彰館」の遺品の陳列。和漢三才図会に始まる文献の筆写、精密な筆跡の英文の記述と菌類の写生図などが並ぶうち、肅然とさせるのはデスマスクだった。熊楠の死は昭和16年12月29日だったがその深夜に死面は採られた。採ったのは保田龍門である。龍門先生とは天王寺の美術研究所で知り合い、アトリエにお邪魔したこと也有って感慨深い。隣の旧邸に入る。木立の下に薔薇が茂り、楠や梅檀、車輪梅、南方系の羊歯オオタニワタリの鉢があり、遺品を収藏した部屋が見通せる。ここで粘菌の新種<ミナカテラ> を発見したのか、と地面を眺めてみると大きな蟻が出てきた。それは羽根らしいものを瞬時に呉んだと見えた。蟻ではなく、ハネカクシ(隠翅虫)に違ひなかつた。後に図鑑で種名の見当はつけてみたが確信はない。併し熊楠旧邸と隠翅虫とは似合はしいものに思えるのであった。

更にほど近い白浜市に入る。そこにも熊楠記念館がある。入ると熊楠の生涯を語るビデオを流している。説明者が荒俣宏という当り役で、情熱こめて熱演している。粘菌を顕微鏡で覗ける展示が並ぶけれど僕は視力が弱って見難い。やはり死面と、恐らくここだけにあるブロンズの胸像が見もので、やはり龍門先生の作である。売店で「南方曼荼羅」を染めたTシャツまで買って次の京都大学付属水族館に行く。大型の鯨類が回る水槽、多数の海胆や海鼠、オニヒトデ、タカアシガニ、鮫鱧、ダルマ

オコゼにカゴカキダイも混る、など。白浜の名店というトンカツ屋で昼食。そして3泊目の宿「古賀の井リゾートホテル」に投宿。7階の部屋から古賀浦湾全景が見降せる。ホテル建築の各種様式を散りばめたような波静かな湾と、冬にも紅葉の見えない南国らしい常緑樹の岬の眺め。食事は階下の食堂での「バイキング」、小粒な栄螺の壺焼きあり。

7階の部屋に戻り、湾の夜景を眺めながらまた各種の酒と3人それぞれのとりとめのない談論のうちに、わが生涯最後であろう南紀の夜が更けて行つた。

11月2日 朝、ホテルのバスで駅まで。白浜駅にはパンダのポスターがある。この動物園はパンダの繁殖が上手で有名、ポスターでパンダが万歳している。帰りはまた「黒潮号」で道成寺を過ぎ御坊を過ぎ、湯浅、箕島などの地名を遡り、山頂に並べた風力発電の白い翼と至る所の蜜柑畑、そして天王寺駅で「また何処かへ行こう。」と鷹三とも別れたのであつた。

帰った週の土曜日は銀座「暁画廊」でのグループ展「交差する異視点」の陳列に行き、翌週の初日月曜と最終日土曜にも行った。その間の水曜に俳句仲間が7人来て我が家で句会、翌週16日に5年後の「国画会百回記念展」に会場で流す回想談を録画すると版画部と写真部で4人来て賑やかにビデオを撮る。あと月末から来月にかけて千葉市立美術館での「国画会千葉支部展」に出品して今年が終る。(2022・11・)